

3-1編集企画体制への道(2)

出版事業②「大型本」を作る②清山哲郎先生との出会い(下) 代表取締役 吉田 隆

事務所が赤門前のころ、清山先生は時折顔を出された。平成7年、湯島の現事務所に移してしばらくした頃も、「ちょっといいか」と訪ねて来られると、4階の事務所の奥の会議室の椅子に腰掛け、タバコをふかしながら、しばらく無言で事務所全体を眺め渡しておられた。移転と聞き、心配しての様子見だったのだと思う。長居はされず、やがて「じゃあ」と和やかな表情でお帰りになった。

先生からは、科学技術の最新トピックや有望な研究者についてのアドバイスをしばしばいただいたが、「バイオメテックス」が今後の重要分野であるとお聞きしたのもこの頃だった。また、期待の若手研究者として北海道大学の岩本正和教授や東京大学の梅澤喜夫教授をご紹介いただいた。そのアドバイスは「環境触媒ハンドブック」(監修:岩本正和)、「最新の分離・精製・検出法」(監修:梅澤喜夫他)として結実した。

●松永顧問

清山先生に普段お会いするのは、定宿にしておられた港区の芝パークホテルが多かった。時間は少しさかのぼるが、平成2年10月、ロビー横のコーヒーショップで談話中に、「君に紹介したい人がいる。自分の弟子で、来年定年を迎える男だが、NTSの力になるはずだ」と話を切り出された。2ヵ月後、同じ場所でお会いした先生と私が話を終えた頃、小柄な男性が現れ、軽く会釈すると「松永です」と名を告げた。

松永氏は、清山先生が昭和28年、九州大学助教授に就任された当時の教え子さんで、翌年、定年でプリヂストン中央研究所長の職を辞すことになっていた。その後会社で何度かお会いし、顧問契約を結ぶことにした。先生にその旨を報告すると大変喜ばれた。

●自社出版路線の確立へ

会社として顧問契約を締結するねらいは、当時、NTS最大の懸案事項だっ

た大型本の自社出版路線の確立だった。会社設立2年後、昭和62年にスタートした電話営業の主力書籍としては、企画から編集までを手がけた「設備診断予知保全実用事典」(昭和63年刊)や「表面科学の基礎と応用」(平成3年刊)などがあつたが、資金力不足で自社出版するには及ばず、いずれもフジテクの資金援助を仰いだ。そのため、両書籍とも2社の共同出版となり、「設備」は初版2500部の内500部が、「表面」は初版2000部の内800部が自社分となった。仕込から本書に力を注いだ者としては、やむをえない選択とはいえ悔しい思いを強いられた。大型本の自社出版路線の確立は、いわば、当時のNTSの悲願だった。

その悲願を乗せた自社大型本第一号は、〇〇現編集企画部長が担当した「吸着技術ハンドブック」(平成5年2月)だったが、松永顧問のご提案による「分子機能材料と素子開発」は、その一年半後の平成6年10月に実現した。それ以降、現在までに松永顧問がテーマの選定から監修者の推薦等のプロデュース役を務められた書籍は、「ゲルハンドブック」「ラジカル重合ハンドブック」「表面処理技術ハンドブック」「実用騒音・振動制御ハンドブック」「ポリマーABCハンドブック」「高分子の寿命予測と長寿命化技術」等の大型書籍の他、「最新光触媒技術」「固体高分子型燃料電池」「可視光応答型光触媒」「ノンハロゲン系難燃材料」「リチウム二次電池」「バイオメテックス」「太陽光発電システム」「分散型電源システム」「カーボンナノチューブ」などのセミナーを元とする講演録がある。

現在も、「ナノマテリアル」関連の企画が進行中であり、NTS最大の経営上のテーマだった、大型本を軸とした自社出版路線の確立は、清山先生、松永顧問お二人のお力添えに加え、〇〇を始めとする編集スタッフの日々の現場努力を得て現実のものとなった。

また、こうした書籍の監修を務められたのは、北海道大学副学長長田義仁教

授や福井工業大学蒲池幹治教授、山形大学遠藤剛教授、東京農工大学学長宮田清蔵教授、(独)理化学研究所国武豊喜教授を始めとする錚々たる研究者の方々であり、将来を見据えたとき、出版社にとってかけがえのない人的礎(いしずえ)を築いていただいた。

●寛容の精神

清山先生は、平成9年6月2日に亡くなられた。享年76才だった。平成8年暮れ、入院先の病院でお会いしたのが最後になった。

福岡まで足を伸ばす機会があれば、時間をぬって市内の平尾霊園に眠る先生の墓前を訪問し、会社の近況などを報告する。昨年、ご自宅のご仏前に報告する機会を得た。

かつてご自宅に伺って以来、約十年ぶりに奥様とお話を交わしたところ、「随分社交的になられて…」との言葉を頂戴した。その時、ふと私は「お会いした当初、人並み外れて浮世離れしていただろう私に、先生はなぜ大きな力を貸して下さったのだろう。私のどこが厳しい先生の気持ちを動かす力となりえたのだろう」と考えた。思うに、先生には厳しさの裏に隠された寛容の精神があつた。「あいつはボーッとしたり水をやれば真っすぐ育つやろう」という先生のほそほそした九州なまりの声がかえりそうに気がする。

縁を得た人の、一つの見どころに目を留め、その他は許容する。そんな先生の生きざまに応えるためにも、寛容に甘えず、更に研鑽を重ねて行きたいと考えている。



●編集後記

秋の夜は、長い。私の気は、はっきり言って短い。仕事中、パソコン越しにふと外を見ると、暗くなるのがやけに早い事に気づく。主婦とは不思議なもので、暗くなると夕飯の献立が頭をよぎる。私の短気さが、むくむくと発生し山積みの仕事に、イライラし出す。あれもこれも、終わってないじゃ〜ん! 投げ出して帰りたい気持ちは、イライラとの戦い。やがて戦いは終わり、岐路につく。電車の中は、ほろ酔いかげんの人もいれば、若いカップルもいる。夜の長さが、身にしみるときもある。でも、良いことも、休日、暗くなるとなく、アルコールを手にする後ろめたさが無くなる。要するに飲める時間が、長くなるということ。こんな私って……(あした)

●編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

NTSニュース

2003年12月号(通巻58号)
2003年11月25日発行